



本の良さ

本の良さ

本はいい。

何がいいのかと問われても、返答しかねるが。

また、字を読むのが面倒くさい、という友人もいる。

だが、俺にとって本は親友といえる。

ジャンルにこだわることなく好きだ。サスペンスから、詩や恋愛ものまで。節操が無いと言われてれば、それまでである。

が、選ぶとすれば時代小説であろう。

特に、池波正太郎の小説がいい。

娯楽小説の部類であろうが、「剣客商売」「鬼平犯科帖」。そして、新撰組や幕末の歴史物。すべてが、その登場人物から、感じるものがあるのだ。食事から男女の営みまで。

それは、現代まで続いている、日本人としての何かに、通じるものでもある。

人に対する思いやりや、一つ事に熱中する大切さ
俺に影響を与え続けてくれている・・・と信じた
表すことが出来ず、イライラする毎日で・・・ん
てることも、教えてくれている。いいな、やっぱ

学生時代

学生時代

さて、一冊を選ぶとなると難しい。

俺の学生時代は、所謂、団塊の世代の後の世代である。

学生運動に明け暮れる、先輩達を見ながら、新世代といわれる、後輩達との間に育った。あまり、親や教師達に、面倒を掛けなかったし、逆に眼をかけてもらった記憶も、特に無い。

ある意味、自由な世代だったのではないだろうか。

親元を離れ、アパート住まいをして、友人達と過ごす。バイトをし、女の子と遊ぶ。小椋佳の歌に酔い、酒を飲みギターを弾き、別れるときには（それじゃ、またな）が、合言葉になっていたような時代だ。

楽しかった。青春と意識したことは無かったが、楽しい思い出とともに、友人同士が、お互いに刺激しあって成長しあったなど、ひとり微笑みながら、振り返る時を持つことがある。

選ばれた一冊

選ばれた一冊

その時代に読んだ、司馬遼太郎の「峠」は、俺に確かな影響を与えているであろう。選ぶなら、この一冊だ。

越後長岡藩の家老、河合継之助を主人公とした、史実に基づいた歴史小説である。

河合家は、家老職に就ける家柄ではない。にも拘らず、（長岡藩の家老には、拙者がならざるを得ないでしょう）などと、上司に向かって、平気で言っただけたりする。その、実の伴った自惚れに、好感を持ったものだ。

あの幕末に、長岡藩をスイスのような中立藩にし、勤皇からも幕府からも距離を置き、戦乱から救おうとした。何事も、自分の足で駆け巡り、実践した行動力と観察眼に、畏敬の念を抱いた。

そして、他の登場人物が魅力的である。長岡藩士は、もちろんのことであるが、福地源一郎・福沢諭吉・鈴木佐吉・エドワード・スネル・山田方谷等々。学ぶことが、数多くあった。

選ばれた理由

選ばれた理由

俺、個人にとって、何故に影響があったかという点、まずは人間の観察力という点からだ。興味を引く人間に出会ったら、自分が納得するまで、とことん食らい付いて、吸収しようとする。花魁にまでも。

そして、疑問に対しては、自分の頭で理論付けをして行動し、他をも納得させてしまう。自分自身に対して説得し、納得させていたのかも知れないが、そう簡単に出来ることではない。

今の、俺の趣味の一つに、人間観察があるが、ここが出発点である。

かといって、俺は決して河合継之助に、のめり込んだわけではない。

彼が、尊敬する人物に、関わったわけでもない。

この本が、俺に対して与えた影響というのは、その面白さと、興味からだけではないからだ。

この本を基点にして、友人たちと激論を交わしていたから、影響が増大しているのだ。

峠

峠

激論といっても、他愛無いものであったと思う。

何しろ、18・9歳の若い時代であったから。

自分達の、知識のひけらかしにしか、過ぎなかったかもしれない。

でも、真剣に語り合った、記憶がある。あるときは、酒を飲みながら。あるときは、女の子を交え、徹夜もした。

ある友人は、坂本竜馬信奉者だった。ある友人は、新撰組命であった。またある友人は、小栗上野介忠順の頭脳と先見の明を褒め称え、会津士魂に涙した。

不思議に、西郷隆盛と勝海舟の名は、出てこなかったと記憶している。

反論・正論・逆論、また反論と飽きることなく、討論した。

そして、それなりに勉強をして、また討論をするといった具合だ。

この時期の、この経験は、俺に大きな影響を与えている。

(霊が主人で、命は道具だ)と言った、河合の思想。

(難路よりも、難路から反応した自分の心の動揺を観察し、その心を、仕立て上げるのが諸国遊歴の目的(つまりは、人生の目的であろう))と言った、河合継之助と一緒に、友人達と過ごした経験は、何事にも代えがたいものになっている。

俺の、諸国遊歴の旅は、まだ終わってはいない。

さてと、その頃を振り返りながら、もう一度「峠」を読んでみよう。